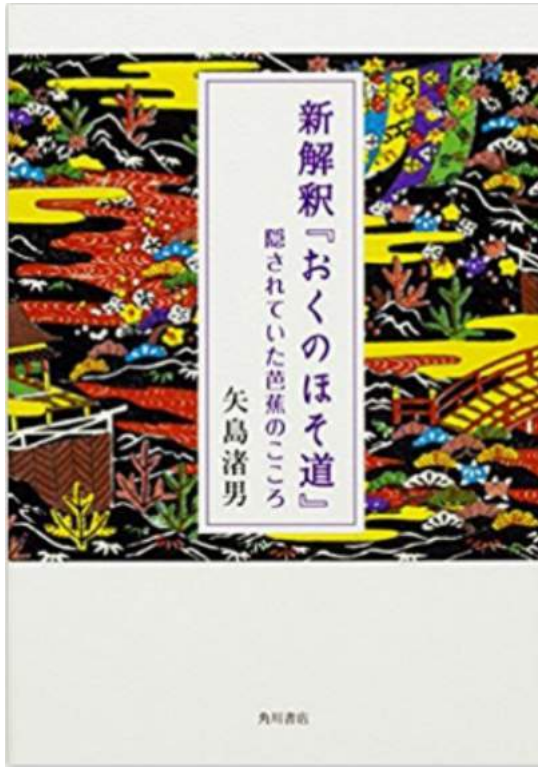


上田高校の恩師（三年間のクラス担任）矢島渚男先生の新著が出た。

いくら不得意科目でも、矢島先生 + 松尾芭蕉とあれば、買わないわけにはいかない。



わたしなどは、やはり、松尾芭蕉については悪しき刷り込みがあるせいか、枯淡の人、わびさびの人のイメージで理解してきてしまったと思う。正に俳句界の“水戸のご老公”の印象が強い。そういった素人の固定観念が崩れてしまった。矢島先生は本当に「若い！」のだ。

荒海や佐渡によこたふ
天河

この句について、矢島先生は「荒海が隔てる佐渡ヶ島に天の川が横たわっている。あの天の川の中で、今宵は恋する二つの星が出会って歎びをかわしているのだ」との註釈を付し、さらに次のように書く。

（引用開始）

「荒海」の句が曾良の「旅日記」の「書留」に記されたとき「七夕」の前書があった。星逢いの夜であることを強く意識しての作であり、それが作句の契機であった。この前書を本文で消したのは、前夜の「文月六日」の句を前に置けば十分に意を伝えられると考えたからであろう。「天の川」は和歌・連歌・俳譜の歴史を通じて「恋」の題であり、芭蕉も例外ではない。この句は七夕の恋の句として発想され詠われたのである。

（中略）

この句は、荒海が人の仲を隔て引き裂くもの、天の川はつなぎ結ぶものという二つの要素を絡み合わせ、二本の強く太い線を引いた明快な構図を持つ。横に引かれた荒海の線と、縦に引かれた天の川の線である。荒海は佐渡と本州との間にあって人々を隔て、天の川は流人たちや島人たちの望郷の思いを本土につないでいるという説（尾形侑「評釈」）も当然生まれていい。海に隔てられた佐渡や本州には悲恋物語も数多く伝わっている。

一句は天上の恋と荒海に隔てられた昔からの流人たちの思いや離れた恋人たちの悲哀を詠っている。芭蕉自身、愛する人をはるかな地に置いていた。こうして、この句を「七夕」の恋句として読むとき、天の川の中に佐渡島を枕とし床として、横たわる恋人たちの姿態さえもイメージしてよいであろう。壮大にして優婉な句である。

（引用終了）「三六 越後路 佐渡によこたふ」

普通の解釈はどうかというと、おそらく次のようなものが標準だろう。

(引用開始)

荒々しく海が波立っています。そのかなたに浮かぶ佐渡の島影を、天の川が荘厳しているのです。天と地とが、渾然一体となって読む者に迫ってきます。単なる風景であることを越えて、十七音が一つの宇宙を抱え込んでいるのです。

(引用終了)『名句鑑賞徹底ドリル』(高柳克弘・17年7月・NHK出版)

当たり障りのない書き方で、わたしなどはこれで満足していたのだ。

まだ、読了九〇%くらいのところで、今のところ忘れないうちに mail するのが精一杯だが、本日はもう一つとり上げたいところがある。次のような箇所も忘れがたい。「閑さや」の句に触れた続きである。

(引用開始)

芭蕉の代表作とされる 古池や蛙飛びこむ水のをと について、静中に動を点じての「わび・さび」の句と評する人が今も多い。もしも芭蕉自身がそう考えていたとすれば、「閑さ」の句は「古池」の句にならった自己模倣であり、それは芭蕉がもっとも嫌った類想句に近くなる。「古池」の句がそうした意味ではなかったから、芭蕉は「閑さや」の句を作ったのであろう。「古池や蛙飛び込む水の音」は「まだ冬枯れの残る」池へ飛び込む蛙の音に、春の訪れ 確かな季節の巡り、生命の躍動を感じた句である。「古」はそのころ「古畑」「古川」などの句も作っていて「春になってもまだ冬のままの」を意味する。

(引用終了)三〇 立石寺 ころろ澄みゆく

註：「閑さや」の句とはもちろん「閑さや岩にしみ入蝉の声」である。

閑かな景色がにわかに活発な胸騒ぐ雰囲気になる。「水の音」は複数形なのである。色で表せばまるで白黒の映画が総天然色に移り変わったような衝撃を受けた。そのことをお伝えしたかった。